

金沢アイスクリーム調査報告書

2019年4月30日

一般社団法人 日本アイスクリーム協会 桜木 正実

丸林 勝之

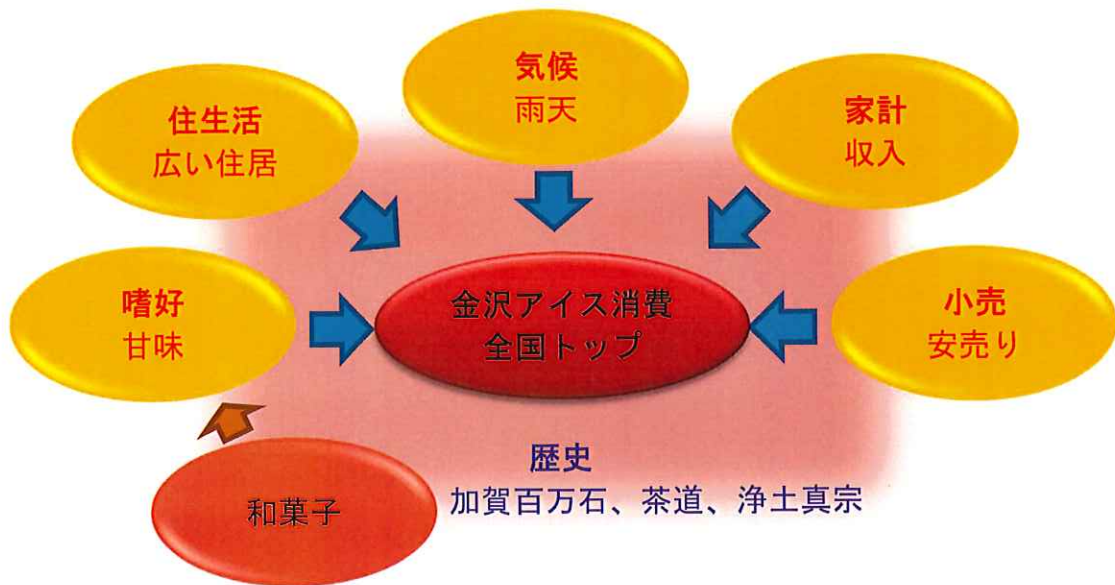
大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科 宮田 安彦

<要約>

今回の金沢に関する調査・分析から、アイスクリームの消費が多い理由を以下の5つのキーワードで整理した。

1. **気候**：他地域同様、気温（外気温）に比例してアイスクリームの消費が増える。ただし、金沢市では25度以上の気温で急激にアイスクリーム消費量が増えるのが特徴的である。また、冬季でもアイスクリームの消費が多いのは、年間の降水日数が日本一で、暖かい室内での生活が長いことに起因するためと推測される。
2. **家計**：金沢市の世帯収入が高く消費支出も高い傾向にあるため、嗜好品への支出を行う経済的余裕を有している。娯楽、外食でも支出は高い傾向にあり、都市型消費生活を送っている。
3. **小売**：スーパーが多いうえに、マルチパックを中心にした割引セールを多発しているため、アイスクリームの購入が促進される。
4. **住生活**：広い家に住み冷蔵庫を複数台所有する家庭も多く、箱アイスを中心にまとめ買いしたアイスを保管し、思いついた時はいつでも食べられる環境を整えている。
5. **嗜好**：金沢市では和洋を問わず他の甘い菓子への消費も多く、甘いもの好きなのに加え、さっぱりしたものもこってりしたものも好きであるが、まさにアイスクリームがこの両方に応えている。また、消費の高いコーヒー、ほうじ茶（加賀棒茶）がアイスクリームと良い相性を持っていると推測される。

上記理由を生み出した背景として金沢の歴史を上げておく必要がある。加賀百万石の経済力と文化政策、そしてその影響を受けた金沢商人の文化志向が、茶道と和菓子の文化を発達させ、さらに浄土真宗への熱心な信仰が行事とあわさって和菓子文化を普及させたことが、現在のアイスクリーム消費の多さの背景になると考えられる。



<目次>

はじめに	5
I. 調査の概要	7
1. 調査目的	7
2. 調査体制	7
(1) 調査主体	7
(2) 調査協力	7
3. 調査方法	7
(1) 「家計調査」分析	7
(2) 金沢市民に対するグループインタビュー	7
(3) 金沢市民に対する店頭調査	8
(4) アンケート調査（「アンケートでみる金沢のアイスクリーム！」）	8
(5) 金沢市民の喫食行動調査	8
II. 調査の結果と分析	9
1. 金沢市におけるアイスクリーム消費の現状	9
(1) 消費金額	9
(2) 消費の特徴（東京と比較して）	9
2. 金沢市のアイスクリーム消費が多い理由	12
(1) 金沢市の気候	12
(2) 金沢市民の家計事情	12
(3) 金沢市における小売業の状況	13
(4) 金沢市民の住宅事情	14
(5) 金沢市民の食についての嗜好性	15
III. 調査結果の歴史的背景	17
1. 加賀国の経済力と商人の消費文化	17
(1) 経済状況	17
(2) 消費文化の発達	17
2. 和菓子文化の発達とその理由	18
(1) 生活への和菓子の浸透	18
(2) 武家と商家におけるお茶文化の発達	20
(3) 信仰による和菓子の庶民への浸透	21
(4) 甘味以外の五感の関与	22
おわりに	25

<付属資料>

- A 家計調査分析
- B 全国の気候の状況
- C グループインタビューからのキーワード抜粋
- D 店頭調査からのキーワード抜粋
- E アンケート調査結果（「アンケートでみる金沢のアイスクリーム！」）
- F 金沢市民の喫食行動調査

はじめに

アイスクリーム協会では、従来から総務省 家計調査を活用した資料を作成、アイスクリームの消費状況を分析し、公表しています。その内容は、アイスクリーム年間支出額、食料費支出額、月別支出金額、世帯主年代別支出金額、品目別支出金額などで、アイスクリームを食生活の中の一部として捉え、分析をしています。資料の中には、都市別支出金額がありますが、これは都道府県庁所在地 47 都市に、政令指定都市 5 都市を加えた 52 都市の結果です。

2017 年アイスクリーム・シャーベットの都市別支出金額で、金沢市が 12,475 円でトップとなりました。それも、2 位の福島市 11,361 円と 1,114 円の差をつけたトップです。2016 年以前については、2011 年、2012 年、2014 年、2015 年は金沢市、2013 年、2016 年は富山市がトップでした。最近 7 年間で金沢市が 5 回のトップ、後の 2 回は近隣の富山市という事実から、北陸のアイスクリーム・シャーベット支出金額には、何か「秘密」があるのではないかと考えていました。

また、マスコミの方々も同様にアイスクリーム・シャーベットの都市別支出金額の高い都市に興味を持たれ、「アイスクリーム・シャーベットの都市別支出金額で、金沢市が多い理由」についての質問が数多く寄せられます。しかしながら、アイスクリーム協会ではこれといった調査もできず、金沢市の作成した「統計をひもとけば垣間見える、金沢の食文化の傾向」などを、ご紹介するに留まっておりました。

2018 年度には協会としても何らかの金沢の調査をしたいと考えていたところ、大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科の宮田安彦教授とご縁があったこと、金沢市役所からも「アイスクリーム・シャーベットの都市別支出金額で、金沢市が多い理由」について興味があるので、調査・研究の何か情報がないかのご連絡を頂いたことから、今回の「金沢プロジェクト」を開始しました。家計調査(10年間の平均値算出)の数値分析、グループインタビュー、店頭調査、1,000人を超えるアンケート調査とアイスクリーム白書(全国調査)との対比、文献調査等から金沢市の歴史的背景や、宗教的な習慣が食生活に与えた影響等を明らかにしていく中で、今回の調査報告書を取りまとめた経緯にあります。

「都市」と「アイスクリーム」という珍しい切り口ですが、金沢市の歴史、食文化、県民性などの中に、アイスクリームという商品が、出会い、馴染み、結びついていったのかをお楽しみいただければ幸いです。

一般社団法人 日本アイスクリーム協会
専務理事 桜木 正実

I. 調査の概要

1. 調査目的

「はじめに」でも述べたように、総務省「家計調査」によれば、一世帯当たりのアイスクリームに対する支出金額は金沢市が2011年から2017年にかけて県庁所在地の中では7回のうち5回、全国一となっており、昨今注目を浴びているが、その理由についていろいろな言説が飛び交っているものの、いまだ表面的な類推のレベルにとどまっている。

そこでこの度、当協会としてその理由をより深く探ることを目的として、いくつかの調査を行うこととした。

2. 調査体制

本調査は以下のような体制(敬称略)を組んで企画・実施した。

(1) 調査主体

- ・ 一般社団法人日本アイスクリーム協会 専務理事 桜木正実
- ・ 同 事務局長 丸林勝之
- ・ 大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科 教授 宮田安彦

(2) 調査協力

- ・ 金沢星陵大学経済学部経営学科 准教授 川澄 厚志
- ・ 金沢市役所
- ・ 澁谷工業株式会社
- ・ 金沢市高砂大学校同窓会
- ・ アルビス株式会社
- ・ 株式会社大阪屋ショッブ

3. 調査方法

調査は以下の方法・手順で行った。

(1) 「家計調査」分析

金沢市のアイスクリーム消費(金額)が日本一であることが注目をあびることになった元のデータを提示しているのが総務省「家計調査」であるが、他の様々な項目についても県庁所在地ごとに一世帯(2人以上世帯)当たりの支出金額を調査・提示しているため、金沢市民の消費動向全体を把握するため、あらためて情報を抽出・整理することとした。

結果の詳細は、付属資料Aにまとめてある。

(2) 金沢市民に対するグループインタビュー

金沢市民のアイスクリーム消費状況の実態とその背景を探るべく、7団体の20代から70代の53人に対して団体ごとのグループインタビューを行い、キーワードを抽出して、後述のアンケート調査設計の参考情報とした。

概要については、付属資料Cを参照されたい。

(3) 金沢市民に対する店頭調査

グループインタビューと同様の目的で、スーパーマーケット 3 店舗の店頭において、計 149 人に対して街頭インタビュー調査を行った。

概要については、付属資料 D を参照されたい。

(4) アンケート調査（「アンケートでみる金沢のアイスクリーム！」）

当協会では、毎年全国の消費者に対してアイスクリーム消費に関する調査（インターネット調査）を行い、これを『アイスクリーム白書』として公表しているが、金沢市民のアイスクリーム消費の動向の特徴を把握するため、同様の調査を金沢市民に対して行い、両者を比較することとした。また、先のグループインタビューおよび店頭調査で抽出されたキーワードを参考に若干新しい質問項目も加えて調査を行った。

調査結果については、付属資料 E を参照されたい。

(5) 金沢市民の喫食行動調査

先述のアンケート調査で示される傾向について具体的な裏付けをとるため、回答者本人と家族の、1 週間のアイスクリーム喫食行動についての調査を行った。

調査概要については、付属資料 F を参照されたい。

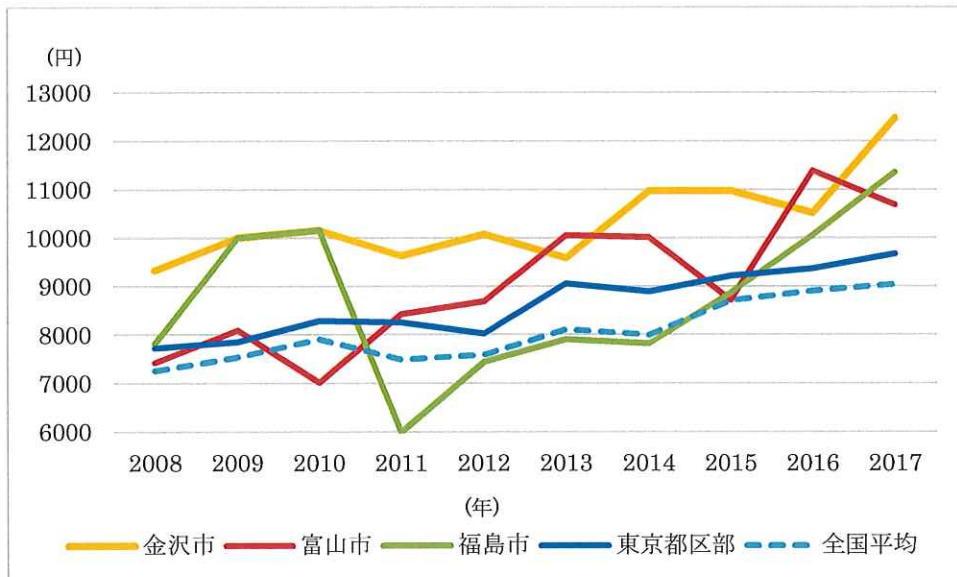
II. 調査の結果と分析

今回の当協会独自の調査に、総務省「統計でみる市町村のすがた」（県別のデータ）、気象庁の気候に関するデータを参照しながら、分析・考察を行った。

1. 金沢市におけるアイスクリーム消費の現状

(1) 消費金額

「家計調査」の一世帯当たりの「アイスクリーム・シャーベット」への支出金額の推移を示したのが、図表 1-1 である。ここ 10 年は全国的にアイスクリーム（以下、シャーベットも含む）の消費金額が上昇傾向にある中、多くの年で金沢市の支出金額が 1 位となっており、10 年平均でも金沢市だけが 10,160 円と 1 万円台を突破しており 1 位となっている（2 位は 9,057 円の富山市）。金沢市民のアイスクリーム好きが確認できる。



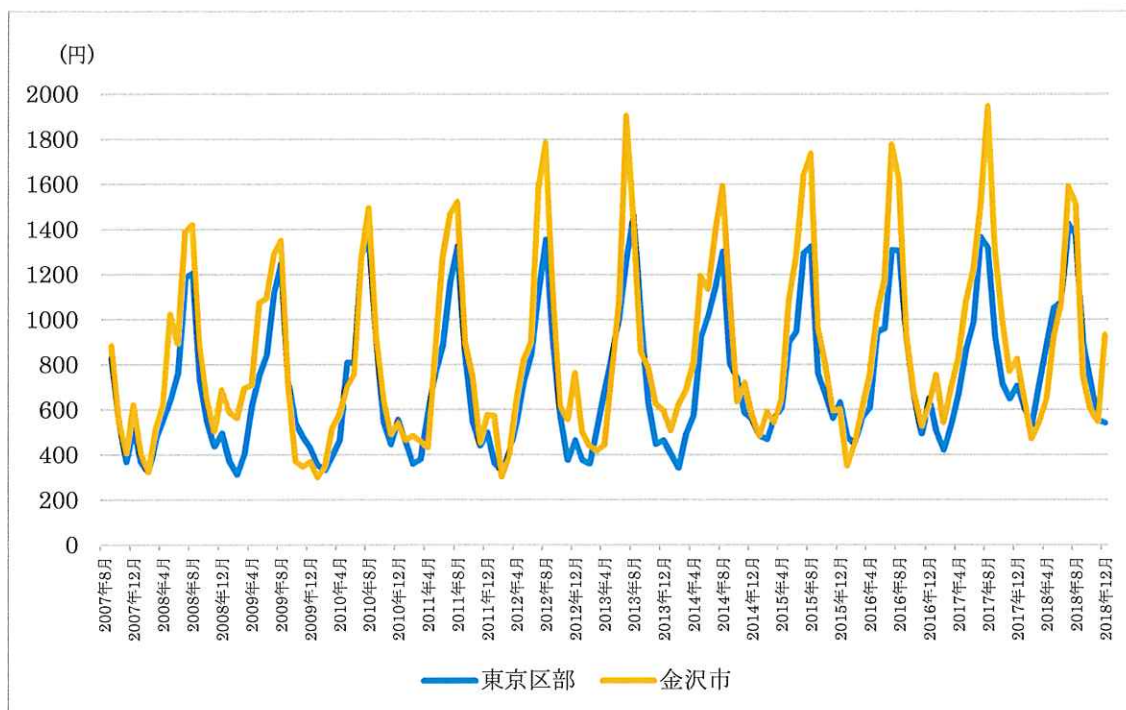
出所：総務省「家計調査」

図表 1-1 主要都市のアイスクリームへの支出金額の推移

(2) 消費の特徴（東京と比較して）

次に、金沢市民のアイスクリーム消費の特徴を知るべく、家計支出において同様の傾向を示す大消費地の東京都区部の消費状況（月別）と比較をしてみたい。

これによると、冬も若干東京都区部よりも支出金額は高いものの、特に夏において金沢市での消費がより多いという傾向が見て取れる。



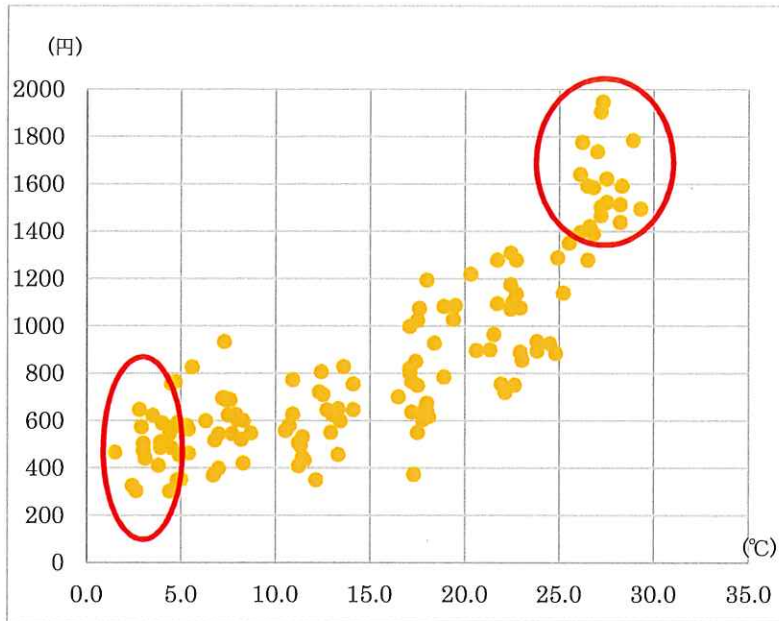
出所：総務省「家計調査」および気象庁データ

図表 1-2 金沢市と東京区部のアイスクリーム消費金額（月別推移）

そこで、月別の平均気温（外気温）とアイスクリーム消費金額の関係をみてみる。付属資料Bにあるように、夏（7、8月）の平均気温は東京より若干高いものの、全国の平均よりはやや低く、外気温自体で金沢市のアイスクリーム消費金額が他の都市より高い理由を説明できるわけではないことがわかる。

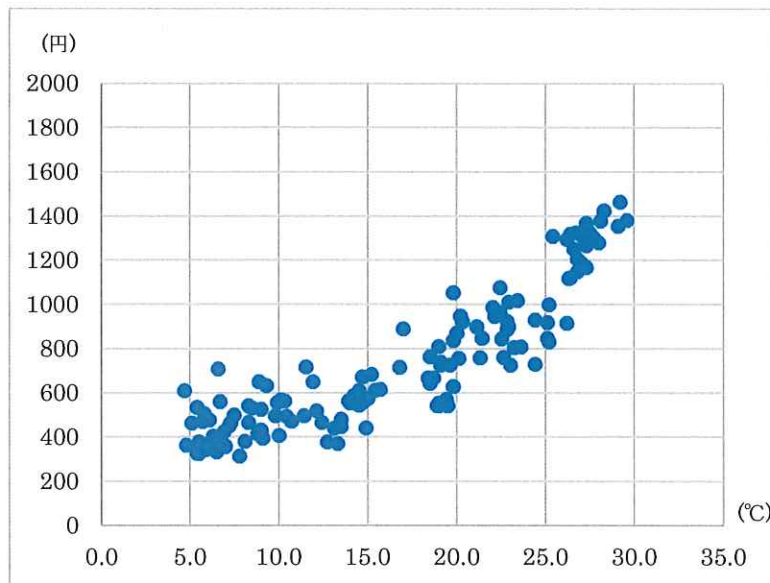
むしろ、金沢市の月別の平均気温（外気温）とアイスクリーム消費金額の関係図（図表 1-3）と東京都区部のそれ（図表 1-4）を比較してみるとわかるように、同じ気温のときのアイスクリーム消費に差がでていう点が着目される。金沢市の場合、気温が 25 度を超えたときに特にアイスクリーム消費が増える。東京都区部の場合、同気温区分での消費金額は 1,200～1,400 円であるが、金沢市の場合最低でも 1,400 円程度であり、2,000 円近い支出をする年もある。平均気温 25 度以上の月の平均消費金額は金沢市が 1,550 円、東京都区部は 1,205 円と明らかな差が生じている。

逆に低気温の月においては、東京都区部が 5 度を下回ることがないため、5 度以下の場合の消費動向については比較できないが、金沢市においては外気温が 5 度を下回っても 5 度以上の場合とそれほど変わらずにアイスクリームを消費していることがわかる。



出所：総務省「家計調査」および気象庁データ

図表 1-3 月別平均気温と月別アイスクリーム消費金額（金沢市）



出所：総務省「家計調査」および気象庁データ

図表 1-4 月別平均気温と月別アイスクリーム消費金額（東京区部）

気温とアイスクリーム消費金額の相関をみると、金沢市の場合の相関係数は 0.84、東京都区部の場合には 0.88 とどちらも高い数値を示していることから、気温が高くなるほどアイスクリーム消費量が増えることがわかるが、図からも相関係数からもわかる通り、金沢市の方が年による上下変動が大きい（同じ気温でもよく食べる年とそうでない年の差が大きい）ことが 1 つの特徴となっている。

2. 金沢市のアイスクリーム消費が多い理由

(1) 金沢市の気候

先ほど見た、気候との関連において東京都区部と差異が明らかになった金沢市民のアイスクリーム消費の特徴はどのような要因に基づくものであろうか。

まず、冬にアイスをより多く食べる理由については、外気温以外の要因が絡んでいることが推測できる。その1つが、付属資料Bに示されている雨天の日の多さである。石川県では年間降水日数が177日もあり、ほぼ2日に1日の割合で降雨がある。これにより自宅滞在時間が長くなり、自宅での嗜好品消費額が多くなると推測できる。

もう一つは室内温度である。金沢市および東京都区部の中では外気温が高くなるほどアイスクリーム消費が増えるという結果が得られているが、全国的にみれば年間平均気温の高い県や市はむしろアイスクリーム消費金額が少ないという傾向にあり、外気温の絶対的な水準がアイスクリーム消費を説明することができない。現代の住環境においては、エアコンの普及により室内温度は人が自由にコントロールできるようになったため、それがアイスクリーム消費に影響を及ぼしていると推測されるが、これを調査するには全国的に大規模なサンプルでの、また長期にわたる調査が必要であり、今回の調査の範囲を超えている。

他方、夏については、15度以上の温度帯において急に消費量が増加し、東京都区部との差が開く傾向をしてみているため、冬以上に外気温以外の要因が絡んでいる可能性が高い。

(2) 金沢市民の家計事情

次に、主として総務省の「家計調査」およびその加工データ（付属資料A）、総務省「統計でみる都道府県のすがた」の数値データをもとに、金沢市民の家計からわかる消費生活の状況について考察する。

1) 収入

まず収入の状況についてみると、2人以上の勤労者世帯の実収入が、2017年度においては金沢市が65.1万円と、東京都区部よりも多く、主要都市の中では第1位となっている（図表2-1）。

次に、金沢市の消費支出をみてみると、2016年度単年度においては37万円/円で上位数都市の1つの位置づけであるが、付属資料Aにあるように、最近10年間の平均値をとると、32.2万円/月であり、これは東京都区部（32.5万円/月）についで、第2位となっている。

このような資料から、金沢市民は高収入、高支出の傾向を持つ都市型の経済生活を送っているとみなすことができる。

1	金沢市	651,218
2	川崎市	638,588
3	水戸市	628,154
4	さいたま市	624,099
5	山口市	615,996
6	福島市	611,777
7	福岡市	610,308
8	山形市	604,258
9	東京都区部	593,036

出所：総務省「家計調査」

図表 2-1 2人以上の勤労者世帯の実収入

2) 支出

付属資料 A によると、支出のうち食料への支出（2008-2017 年平均）は 99 万円／年と、全国の都市の中で第 6 位であるが、金沢市よりも上位にあるのは、東京都区部、横浜市、川崎市、京都市、さいたま市などの大都市であるから、地方都市としては金沢市の食料への支出はかなり高水準にあるといえよう。

その中で、菓子類への支出が多く（9.8 万円／年と全国第 1 位）、コーヒー・ココアへの支出も全国第 1 位である。付属資料 A には掲載していないが、国税庁の統計によれば日本酒消費量は石川県全体で 8,956 kl（2016 年）と全国第 3 位となっており、いわゆる嗜好品への消費が目立って多くなっている。すなわち、人間の生存にとってかならずしも必要のないものへの支出が多いということであり、余裕のある食生活を送っていることが見てとれる。

余裕のある暮らしは、食生活以外の面にも表れており、たとえば金沢市の 2017 年の教養娯楽費（2 人以上世帯）が 41 万円／年となっているが、40 万円を超えるのは横浜市、東京都区部らの大都市を中心とした 7 都市のみである。また外食も娯楽とみなせば、人口千人あたりの飲食店数は石川県では 5.77（2016 年）と全国第 7 位であり、こちらも大都市並みの状況にある。

こうして、まず余裕のある金沢市民の都市型の消費生活が、アイスクリーム消費の多さの背景にあるといえよう。

（3）金沢市における小売業の状況

以上の家計の状況のほかに、家庭をとりまく産業側の状況、すなわちアイスクリームを販売する小売業の状況も見ておく必要がある。

総務省「統計でみる都道府県のすがた 2018」によれば、石川県の百貨店・総合スーパーの人口 10 万人当たりの数は 1.82 店と全国第 2 位になっており、アイスクリームを購入する際の利便性を支えていることがわかる。

これらの小売店においては、コンビニと異なり、マルチパック（箱入りパック）など大量購入できる商品も多く、また小売店間の競争が激しいことから、週に何度か 4 割、5 割の割引という東京都区部には存在しない割引率でのセールを実施している。そうした機会にアイスクリームをまとめ買いするという購入行動が盛んであることは、アンケート調査「アン

ケートでみる金沢のアイスクリーム！」(付属資料E)の結果からもわかっている。

こうして、金沢市においてはアイスクリームを購入する場所が多く、またバーゲンセールが頻繁に行われるため、アイスクリーム購入の利便性・容易性が高いといえる。

なお、半額の割引セールで購入することが多い金沢市民のアイスクリーム消費金額が日本一ということであれば、単価が安い分、これを量に換算するとさらに目立ってアイスクリーム消費の多い都市であるということが出来るかもしれない。

(4) 金沢市民の住宅事情

1) アイスクリームの家庭内喫食の利便性

アイスクリームの購入においてはまとめ買いすることが多いということがわかったが、まとめ買いをしたアイスクリームは家庭において保管されなければならない。これについての事情はどのようなものであろうか。

まず、金沢市民の自宅には、今回のアンケート調査(付属資料E)からも明らかになったようにかなりの割合で複数の冷蔵庫に収納される。全回答者の2割くらいが自宅に冷蔵庫を2台以上もっていると回答している。

これを支える要因には収入の高さもあるが、住宅の広さが強く影響している。総務省「統計でみる都道府県のすがた2018」によれば、北陸3県の持ち家住宅の延べ面積は全国の中で特に広く、うち石川県は162.5㎡/戸(2013年)と日本第4位(1位は富山、2位は福井)である。また、持ち家住宅の畳数(一人当たり)は17.62畳で日本第3位(富山2位、1位は秋田)である。

こうして、金沢市民は、多量のアイスクリームを買い置きしておき、思い立ったらいつでもそれを食べられるという環境の中で生活していることがわかる。

2) アイスクリーム喫食の自由性

「アンケート調査」(付属資料E)の「食べるタイミング」(複数回答)をみると、金沢市においては「夕食後」が最も多く半数以上がこのタイミングを挙げている。全国平均と比べる「夕食後」「風呂上り」が多く、逆に「午後のおやつに」がやや少ない。また「食べるきっかけ」では「リビングでくつろいでいるとき」が多い反面、「気分転換したいとき」はあまり多くない。

さらに「金沢市民のアイスクリーム喫食行動調査」(付属資料F)の個票(非公開)をみると、「夕食前」「朝食代わり」という回答もあり、食シーンについての標準的な想定をはずれた食べ方をしていることがわかる。2月下旬～3月上旬の調査であったため、「こたつに入りながら」などの暖をとりながらの状況が専らであろうと予想していたが、それ以外の状況も多いようだ。また、「誰と食べたか」という質問に対しては、「一人で」もかなりある。ここから、家族にも時間・状況にもしばられることなく、1日の中で思い立ったらアイスクリームを手にする様子がうかがわれる。

このように、金沢市民はアイスクリームを夕食後のデザート定番として重要な位置づけを付与している一方で、とても自由に(無計画に、無目的に)アイスクリームを喫食するという習慣をもっていると考えられる。手を伸ばせばすぐアイスクリームに届くという環境があって、また廉価であるため費用をそれほど気にしなくてもよいというお気軽さがこうした食習慣を生んでいるものと考えられる。

(5) 金沢市民の食についての嗜好性

1) 甘いものへの強い嗜好

再び「家計調査」(付属資料A)に戻って、アイスクリーム以外の菓子類の消費状況をみてみたい。

まず、菓子全般への消費支出は第1位であり、第2位の水戸市をかなり離している。せんべいなどの甘くない菓子への嗜好もあるが、概ね甘いものについての消費金額が高いことから、金沢市民は菓子に関しては甘いもの好きだといえよう(後述のように砂糖そのものの消費は少なく、食べ物すべてについて甘いもの好きということではできないようである)。

「金沢市民のアイスクリーム喫食行動調査」(付属資料F)で、8家族34人に「甘いもの」と「辛いもの」のどちらが好きかという質問をしたところ、28人は「甘いもの」が好きだと回答しており、ここからも金沢市民の甘味好きが読み取れる。

次に、甘い菓子のなかの味わい(風味・フレーバー)の好みをみてみると、ケーキ(第1位)やカステラ(第2位)の消費が多く、それら以外の洋生菓子の消費も多いこと、また、チョコレート(第1位)やチョコレート菓子(第5位)の消費も多く、プリン消費もまた多いことから、濃厚な味わいを好む傾向が読み取れそうである。しかし、饅頭の消費量はやや低めであるが、「その他の和生菓子」は2位に大きく差をつけて全国第1位であり、和菓子が一般的に洋菓子より淡白な味わいであることを考えると、必ずしも濃厚好みあるとはいえない。ただし、ようかんやゼリーの消費金額は低く、またスナック菓子の消費が全国第2位であるから、あまり淡白な味は好みではないと推測できる。

「金沢市民のアイスクリーム喫食行動調査」(付属資料F)で、「あっさり」した味が好きか「こってり」した味が好きかを聞いたところ、「さっぱり」が14人、「こってり」が12人と両者が拮抗していたことから、金沢市民は、味覚上は甘いもの好きだという特徴はあるが、その中での脂肪分に関係する味わいについては多様な好みを示している。

そうした状況の中で、翻って、アイスクリームには氷菓のようなややあっさりしたものから高脂肪アイスやチョコレートコーティングしたアイスのような濃厚なものまで味のバリエーションが豊かであり、このカバレッジの広さが金沢市民の菓子に対する多様な嗜好を受け止めるものになっているようだ。

2) 料理との関係

「家計調査」(付属資料A)から個々の食料品への支出の動向をみてみると、肉類、乳卵類への支出金額は他の都市と比較して相対的に少なく、また、調味料(油脂、食塩、しょうゆ、砂糖、みそなど)の使用量も少ない。他方で、魚類への消費が多い。このことから判断する限りでは、金沢市民は主菜、主食に関しては、京料理のような薄味であっさりとした料理を好む傾向にあると推測される。

しかし、先にみたように、全体的に甘味好みの傾向があり、それが特に菓子の選択において表れていることを掛け合わせて考えると、確証はないものの、金沢市民は甘味を主食・主菜にそれほど求めず、甘味は専らデザート、おやつに求めているということが考えられる。

山辺(2017)は、日本のさまざまな料理にはかなりの甘味が用いられているのに対してヨーロッパの料理では果物ソースなどを除いてほとんど甘味ははいっていないために、甘味がたっぷりなデザートを取るのではないかと推論している。先にみたように金沢市民はアイスクリームを自由に食べているものの、「食後のデザートとして」が定番となっているということは、多少はこのヨーロッパ型のパターンが当てはまっている可能性がある。

3) 飲料における嗜好との関係

和菓子やケーキ類と異なり、アイスクリームは飲料を伴わずに食べられることが多いが、金沢市民の好む飲料から間接的にアイスクリーム好みを傍証することができそうだ。

「家計調査」からわかることは、金沢市民の「コーヒー・ココア」への支出金額が高いことであり、約 12,300 円／年と全国第 1 位である（付属資料 A）。ただし、コーヒーとココアは本来かなり味わいの異なるものであり、後者は「飲むチョコレート」というべきものであるため、こちらの比重が高い場合は、チョコレートの消費の延長ととらえることができるものであるが、ここではコーヒーの消費量をあらわすものとみなしておく。

他方で、茶道の盛んな金沢については意外な気もするが、金沢市での茶類の消費は少ない。茶を種類別にみて緑茶に絞っても、消費金額は 3,244 円（2015～2017 年平均、全国第 38 位）と高くはない。しかし、緑茶の消費量は全国第 10 位の 992g となっている。一般的にコーヒー、紅茶、緑茶は互いに競合する代替財であることを考えると、金沢市の緑茶の消費量は多いといってよいのではないだろうか。そうすると、金沢市民は茶道の場では抹茶などをたしなむが、日常的には煎茶よりも単価の低いほうじ茶（加賀棒茶）中心に飲んでおり、それが購入単価を下げるため、消費量の割には消費金額が低くでるものと推測される。

飲料についてのこうした好みは、実はアイスクリームを好む傾向とは整合性が高いと思われる。まず、河野（1977、p.93）によれば、煎茶にテアニン（カテキンの一種）の甘味は脂っこく味の濃厚な食べ物には合いにくい。それに対してコーヒーは、その苦みがさりとした後味を与えるのでそうした食べ物に合うという。お茶の成分表（図表 3-1）で確認すると、ほうじ茶は茶葉（「加賀棒茶」は茎だけ）を焙煎するのでテアニンがなくなり、また焙煎によって香気成分が生まれる分、よりコーヒーと近い存在になるものと思われる。

こうして、金沢市民のコーヒー好き、ほうじ茶好きは、乳脂肪分を含むアイスクリームとは相性のよいものであり、アイスクリーム消費を間接的に支えているものとなっているといえるのではないだろうか。

	エネルギー (kcal)	たんぱく質 (g)	カリウム (mg)	カルシウム (mg)	葉酸 (mg)	ビタミンC (mg)	カフェイン (mg)	タンニン (mg)
玉露	5	1.3	340	4	150	19	0.16	0.23
抹茶	324	29.6	2700	420	1200	60	3.2	10.0
せん茶	2	0.2	27	3	16	6	0.02	0.07
かまいた	0	0.1	29	4	18	4	0.01	0.05
番茶	0	Tr	32	5	7	3	0.01	0.03
ほうじ茶	0	Tr	24	2	13	Tr	0.02	0.04
玄米茶	0	0	7	2	3	1	0.01	0.01
ウーロン茶	0	Tr	13	2	2	0	0.02	0.03
紅茶	1	0.1	8	1	3	0	0.03	0.10
コーヒー	4	0.2	65	2	0	0	0.06	0.25

注：それぞれ100g当たりの数値（抹茶は粉末100g、それ以外は浸出液100g）。Trは「微量」を意味するtraceの略字。

なお、「テアニン」「カテキン」は「タンニン」の項に含まれている。

出所：「日本食品標準成分表2015年版（七訂）」

図表 3-1 お茶・コーヒーの主な含有成分量

Ⅲ. 調査結果の歴史的背景

今回の調査によって得たデータによる分析と考察は以上の通りであるが、ここではさらにそれらの背景にある歴史的事情をいくつかの文献により探ってみたい。

1. 加賀国の経済力と商人の消費文化

(1) 経済状況

現在の金沢市民の裕福さについては、かつての加賀藩の裕福さが関係していると推測される。加賀藩は前田利家を藩祖とし、2代目藩主利長は119万石の所領を有するようになり、途中富山藩や大聖寺藩の分藩もあったが、5代目藩主綱紀のころは公称103万石、実際には133万石もあったという(田中、1980)。その後幕末に向けて藩の財政は窮乏していくが、この当初の経済力が人口を養い、商業を活性化させ、また徳川家に対する政治的思惑も手伝って文化への投資がなされ、今日の都市型の消費生活の礎を築いたと思われる。江戸時代に加賀藩からの脱藩者が1人もいなかったというが(岩中、2007)、これは前田家の厳しい統制の影響もあるだろうが、主として加賀藩に経済力があったからなのではないだろうか。

加賀藩の文化政策が経済力の維持に関係しているのが、金沢商人の間で伝わる財産三分法である。これは全財産の3分の1は道具(美術品)に、3分の1は不動産に、残りの3分の1を運転資金にするというものであり、リスク回避のための資産のポートフォリオ管理というべきものであるが、その対象の1つが「道具」であるという点が金沢の特異なところで、これは文化重視の藩政がなければ考えられなかったことであろう。祖父江(2012)によれば、大正から昭和にかけて金沢市内には、かつての「高等遊民」のような「無職業者」、すなわち定職がなくても金利や蓄積した財産で生活ができる者が全市民の20%近くを占めたというが、これなどは、こうした財産分法により、現金以外の資産を多くもっていたことによるのではないかと思われる。

それから、第2次世界大戦で戦災を免れたことも金沢の経済力を支えたと思われる。金沢市内では建物疎開として防災のため民家を取り壊されたこともあったが、全国で215の都市が罹災した中で、金沢市は地方の大都市であるのに空襲を免れるという大変珍しい例となった。食糧不足はあったものの、市内の社会的なインフラは戦前と変わらなかったため、自宅の再建や社会資本再興といったストックの部分に資金を投じる必要がなく、日常的な経済活動をすぐ再開することができた。

こうして、余裕を持った生活を可能にする経済力は、他の地方都市に比べて高く維持され、今日に至ったと思われる。

(2) 消費文化の発達

前田家の厳しい統制下で金沢では独特の商人文化が発達した。武光(2001)によれば、前田家は商人の他国との自由な交易を禁じる津留政策をとったほか、産物方の役人に商工業者の統制をおこなわせ、一部の豪商のみがこれと通じ、金沢の商業を握っていた。こうして金沢商人は前田家とその家臣を顧客とした御用商人が主となり、互いの競争がなくてもいわず殿様商売で生きていけたようである。このことは、金沢の商家は他地域と違って暖簾分けをしないこと、屋号を染め抜いた法被などを着ないことに表れているという(小林、2009)。また、田中(1988)によれば、加賀藩が旨い米を自己消費し、旨くない米を大阪に

出荷しているのをみて、江戸の商経済学者海保青陵が、それを逆にすれば利益があると説いたものの、誰も耳を貸そうとしなかったという逸話があるというが、これなどは利益を重視しない金沢商人の気質をよく言い表している。

そうした商売っ気のなさは、1895（明治28）年の『北国新聞』の論説にも書かれている。すなわち「他国人の来りて先ず驚くものは店先の賑やかならぬにあり。商売は冷淡なるにあり。我より之を求めざるは深く蔵（かく）して出さざるなり。寧ろ店頭を冷やかさることを嫌ふも敢えて教えるをなさざるなり」と、客が店に来るのを嫌がるくらい商売っ気がないというのである（田中、1979）。

反面、金沢商人は武士に負けなだけの教養を身につけないと武家に出入りできないため、武士の趣味である能楽、茶道などを嗜みとしており、屋根葺き職人や植木職人までが謡を口ずさみ「天から謡曲が降ってくる」とまでいわれたという（祖父江、2012）。先の『北国新聞』も「茶の湯俳諧等の風流三昧、最も好んで謡曲を謡う。湯屋の三助も桶屋の権助も猫も杓子もこれを謡ふなり」と記している。また、田中（1969）が紹介するところでは、「読売新聞」（1969年1月18日付）の「石川県新地誌」の記事の中で、「上は木綿の着物でも、下着は絹をつけるだてさがありました。四〇歳ぐらいになると商売は番頭まかせ、謡曲や茶の湯にこり、骨董品を集めるなど風流な暮らしをするのが商人の誇りでした」という尾張町の商店主の話が掲載されている。さらに、粋な生き方をする者が明治以降も各町内で1人や2人はいたとされ、「着流しでへこ帯を締め、白足袋のセッタ（雪駄）履き姿で、芝居見物の後、縄ノレンのさがった酒屋の店先で、ちょっとひっかけ、遊郭にくり込み遊ぶという、いわばドンダクレ（あるいはドンペー）といった、旦那さんたちがいたという。金沢の袋物商である木倉屋銈造さんの話によれば、そんなドンダクレの旦那衆は、決して金を使うのではなく、ちょっとした小銭を最大限に使って遊ぶことがイキであった」という（金沢民俗を探る会、1984）。

ところで、金沢市は空襲を受けなかった例外的な都市であり、それがインフラの継続を可能にしたと先に述べたが、同時にそれは金沢市が国による復興計画の対象にならなかったということも意味する。田中（1979）は、これが空襲被害にあった他の地方都市と異なって金沢市の戦後の近代化を著しく遅らせたとみているが、それは昔ながらの町、施設が存続するということであり、このことが金沢商人の気質を温存することになったのではないかと思われる。

このように、金沢商人の関心は消費生活、文化的生活に向けられ続け、戦争による断絶を経験することなく、その気質を現在の金沢市民も受け継いでいるのではないかと思われる。

2. 和菓子文化の発達とその理由

（1）生活への和菓子の浸透

アイスクリームを含む洋菓子が日本に入ってくる前の甘い菓子はもちろん今でいう和菓子であり、金沢市民の甘いもの嗜好を全体的に引き受けていた。明治以降その一部が徐々に洋菓子に、そして戦後、ケーキやチョコレート、アイスクリームに向けられたのだと解釈できる。それゆえ、江戸期からの和菓子文化の発達具合が今日の洋菓子の消費量に影響を及ぼしていると考えるのは自然なことである。

まず、和菓子消費の現状は第3章で確認したとおりだが、その背景には、金沢で盛んな年中行事、人生行事が、以下の様に多くの場合和菓子と結びついているという事実がある。

- ・ 1月1日正月 1月1日正月－「福梅」「福德」
- ・ 4月3日桃の節句－雛菓子（「金華糖」など）、菱餅（嫁の婚家に届ける）
- ・ 6月5日端午の節句－ちまきまたはかしわもち（嫁の婚家に届ける）
- ・ 7月1日氷室－氷室饅頭（嫁の婚家に届ける）
- ・ 7月上旬お中元－練り羊羹5本（得意先に届ける）
- ・ 8月1日土用もち－「ささぎもち」をお重に一箱（嫁の婚家に届ける）
- ・ 9月15日秋まつり－「3色かいもち」（嫁の婚家に届ける）
- ・ 12月下旬年末の挨拶－紅白のお鏡（嫁の婚家に届ける）

出所：「日本の食生活全集 石川」編集委員会（1988）、小林（2009）

図表 4-1 金沢の年中行事と和菓子

- ・ 出産前－「ころころだんご」（出産一か月前の戌の日に、嫁の実家から婚家へ、婚家から実家へ贈る）
- ・ 出産後三日目－「三つ目の餅」（力餅、産餅）を鯛の味噌汁に入れて産婦が食べるほか、関係者に配る
- ・ お七夜－産婆、婿、その両親を招きごちそうする際、赤飯、万頭、餅をつける
- ・ 出産後、嫁が婚家に戻る際－万頭、五色生菓子、紅白の餅を持参し、親戚、近所に土産として配る
- ・ 子供が生まれた年の暮れ－「キネマキ・マユダマ」（男の子なら軍配の形をした「キネマキ」、女の子なら柳の枝につけた「マユダマ」を嫁の実家から婚家に送る）
- ・ 初誕生－おはぎを作り子供の足にぶつける、もしくは一升の押餅を作り子供に背負わせて倒す
- ・ 入学・卒業・成人・就職－紅白万頭を内祝いとして親戚知人に配る
- ・ 嫁入り－「一生餅」（一升一重のお鏡餅）を嫁入り道具とともに持参
- ・ 結婚式－花嫁を見に来た人に紅白万頭または五色生菓子をふるまう
- ・ 結婚式翌日の御部屋見舞－五色生菓子をお重にいれ袱紗をかけて親戚・知人に配られる
結婚式の里帰りの土産－五色生菓子

出所：SAS 地方都市グループ（1981）、千代ほか（1994）

図表 4-2 金沢人生行事と和菓子

このような菓子を大量に消費する食文化は、金沢が江戸末期から日本有数の砂糖消費地、特に高級な和白糖の消費地であったことから、当時からすでに定着していたように思われる。

樋口（1935）によれば、江戸末期においては、大阪が黒糖、和唐の大集散市場となっていたが、「大阪より各他国に送られる各種砂糖は江戸を除けば、加賀、能登、越中、越後の北陸地方を筆頭に、伊勢、尾張、近江、美濃の中東地方及機内一円と山陰、山陽の両道から陸奥、九州の僻陬の地にまでほとんど全国一円に及んでいた」され、また、「地方都市として

最も砂糖を消費せしものは尾州名古屋と、北陸の金澤、富山、新潟等で、何れも都市の消費生活が向上し、特殊名菓があり菓子商が軒を並べていた都市であった」(p.452)とされている。また、名古屋については「外郎」の名が、北陸については「長生殿」「越の雪」の名が挙げられている。「北陸地方に発達せる「越の雪」「長生殿」等の名菓は和唐使用の高級菓子として幕政時代より大阪、江戸両都にも鳴り響いていたものであった。従って北陸地方には黒糖の他、高級の和白糖が必要されていた如くである」(p.460)という具合である。

(2) 武家と商家におけるお茶文化の発達

このような和菓子文化の発達の背景には、加賀藩前田家の治世と歴代藩主が茶道に造詣が深かったことが関係している模様である。

初代藩主前田利家は茶道を千利休や織田有楽から学び、有名な北野大茶会にも出席している。2代藩主利長も利休の弟子であった。藩主の茶道に対する熱意は、中山宗半をはじめとする家臣たちの間に及んだ。3代藩主利常のころになると幕府から嫌疑をかけられることを避けるという政治的思惑も加わり、茶道、能楽、美術工芸、学問、菓子・料理といった文化的志向を強く示すようになる。それが5代藩主綱紀に継承され絢爛豪華な百万石文化につながったとされる(田中、1969)。こうした武家社会での茶道の浸透が出入りの商人たちに広まり、さらに商人間で広まることで、金沢における茶道文化の定着につながっていったと考えられる。

さらに、商人たちの間では単なる嗜みではなく、以下の引用(小林、2009、p.132)にみるように、商談の場として茶道が取り入れられ、商習慣としても浸透した。

今もなお、呉服屋お茶などの商いの基本は訪問商売にあり、常に日常的な付き合いを重視した顧客関係のなかでつづけられてきた商い慣行がある。

たとえば、市中尾張町の裏通り、今町辺りに見られる格子のキムスコが特徴的な「しもたや(仕舞屋)」風の民家には、たいがい奥の庭やセドに面して茶室を設けている家が多い。それは茶室が、なんでも大正、昭和初期にこのあたりで米や小豆を商う、俗に「ベイショウ(米商)」と呼ばれた相場師たちの商談の席として使われたともいわれるが、なかには小さな枯山水の露地や手水鉢などを設けた、本格的な小間の茶室も見られた。

こうした場では当然様々な和菓子がお茶請けとして提供されたに違いなく、和菓子の発達はお茶文化と軌を一にしているはずである。

金沢の和菓子の由来については、金沢市のホームページには利家が入府した天正18(1590)年、ついできた堂後屋三郎兵衛から始まる説が紹介されているが、市内の優良な和菓子屋である諸江屋のホームページには、能登出身の三郎右衛門が、金沢に出て開業したのは、利家が入城する天正11年より前の天正10年とする北國新聞の『月刊アクタス』の記事を引用しており、いずれが正しいかは定かではない。いずれにせよ、金沢の和菓子文化は前田利家の入府からはじまり、茶道の普及に伴って広がったといえる。

こうした文化遺産は現在まで継続している。例えば、総務省の「平成28年社会生活基本調査」に基づき茶道の行動者人口(10万人あたり)を計算すると、全国平均が15.5人であるのに対して、石川県ではその2倍ほどの31.5人となっていて全国第1位である

(図表4-3)。富山県がそれに続いているのをみると、富山もまた前田家に始まる茶道文化を受け継いでいるようだ。

1	石川県	31.5
2	富山県	28.5
3	京都府	24.4
4	鳥取県	24.0
5	奈良県	23.8
6	三重県	20.4
7	福井県	20.2
8	島根県	19.8
9	香川県	19.7
10	岡山県	19.5
	全国平均	15.5

図表 4-3 人口 10 万人当たりの茶道人口

また、総務省「平成 26 年経済センサス - 基礎調査 事業所に関する集計」と同「人口推計」の平成 26 年度の数値を掛け合わせ、人口 10 万人あたりの生け花・茶道教室の事業所数を計算すると、石川県がダントツの 1 位となっており、稽古の熱心ぶりが窺える状況となっている（図表 4-4）。

1	石川県	105.5
2	新潟県	77.8
3	福井県	73.4
4	富山県	67.3
5	島根県	66.0
6	山形県	63.7
7	滋賀県	54.4
8	岩手県	53.0
9	高知県	52.8
10	岐阜県	51.9
	全国平均	34.4

図表 4-4 人口 10 万人あたりの生け花・茶道教室

（3）信仰による和菓子の庶民への浸透

和菓子文化の発達の背景には、先ほどみたように、武家社会の性格を反映した金沢商人の気質があったが、農民などについてはまた別の要因があった。それは、前田家の金沢入府以前の歴史により、加賀地方において浄土真宗の影響力が今に至るまで大変強いものとなっていることによる。

浄土真宗は、1471 年に本願寺の蓮如が加賀国と越前国の境の吉崎に道場を立てたことにより急速に北陸地方において普及し始め、1488 年にはこれを弾圧する富樫政親を農民一揆が倒し、以降 100 年近い間、有力農民や浄土真宗の大坊主が「百姓のもちたる国」として加賀を支配していたという。こうした経緯があって、石川県においては現在も浄土真宗の檀家が大変多く、法要・行事も熱心に行われている模様である。今回の「グループインタビュー」（付属資料 C）からも、今も月命日を行う家も多い様子がうかがわれた。これにともなって供物、接待時のお茶請けという形で和菓子がたくさん消費されよう。親鸞聖人が小豆好きだったことから、報恩講（親鸞聖人の正忌）では豆腐と小豆の味噌汁を食するようであるが、こうした宗派始祖への尊敬心も関係しているかもしれない。

さらには、こうした接待と甘味を尊ぶ真宗文化は金沢のうどん屋に表れていたとみる見解もある。小林（2009）によれば、明治期の金沢のうどん屋は、関西風の宗田鯉の薄味のだし汁に甘口の醤油味だが、さらに砂糖をいれてすこぶる甘かったという。そして、その背景には周辺の農村から「金沢に出てくる理由の1つはお寺のお仏事の折の参詣であり、その場合、仏教では常に甘いお菓子や果物、飲み物が供えられるもので、お寺の参詣にも甘いうどんを食べることが必要だったのではなかろうか」（p.67）としている。

こうして加賀の庶民への甘味文化の浸透は真宗への信仰によって支えられてきたと考えられる。

（4）甘味以外の五感の関与

金沢の和菓子には、正月の紅白梅、金華糖、五色生菓子など、他の地域にはない多色彩的な色彩感覚が埋め込まれており、九谷焼のような器にもそれは反映されているように思われる。しかし、色の中では特に「白」が特別な意味をもっていると思われる。

それは1つに白山信仰が広く存在していることによる。小林（2009）に従えば、白山神は、神仏混淆（しんぶつこんこう）時代には菊理比咩（くくりひめの）命であり、本地垂迹（ほんちすいじゃく）すると九頭龍に変身し、次いで十一面観音菩薩になったとされている「菊理」とは本来は「泳り（ククリ）」の意味で水の中を泳ぐこと、つまり水中に入って禊（しづめ）をすることだと民俗学者の折口信夫が解説していることから、白山は水をもって禊祓をする清浄な山ということになるとのことである。

このことを金沢の菓子文化に結び付けているのが旧暦6月朔日にいただく氷室饅頭である。これは道願屋彦兵衛の発案により生まれた麦饅頭であるが、その背景に白山氷（しろやまごおり）の存在がある。白山氷は古代中国の暦、二十八宿の鬼宿日の災厄を祓う儀礼として食されたものであり、泉鏡花の随筆『寸情風土記』に、明治期の金沢市中で、夏になると笹や菰にくるんだ雪の塊を鋸で切って「コオリコオリ、ユキノコオリ」、あるいは「ガバリガバリ」と喚くような売り声で、白山氷を売り歩く行商人のことがかかっているという（小林、2009）。氷は冬場に積もった雪を氷室に保存し、夏に取り出すものであるが、この氷室を開く日に、白山氷の代用品として無病息災を祈って麦饅頭を氷室饅頭として食べるようになったという説がある。

現在の氷室饅頭には水色やピンク色のものがあるが、基本色は白である。小林（2009）は、白は穢れを祓い浄化することから、白山氷は真夏の厄除けを目的とした信仰的な要素の加わった縁起菓子の性格がもつと解釈している。

これに加えて、五行思想の五色と仏教の西方浄土信仰もまた、「白」に対する特別な意味を喚起しているのではないかと小林はいう。つまり、五行思想においては、青・朱・黄・白・玄がそれぞれ東・南・中・西・北を表しており、白は西を指す色となっているが、ここに西方にあるとされる浄土を希求する気持ちが加わり、「白」が特別な意味となっているのではないかというわけである。

推測の域を出ないのではあるが、加賀の人々の白色への思い、そして白山氷のなごりが、白く冷たいアイスクリームを金沢市民の間で受け入れやすいものとしたという可能性は、若干ながらあるのではないかと考えている。

以上

<参考文献一覧>

- ・ 岩中祥史『出身県でわかる人の性格―県民性の研究』新潮文庫、2007年。
- ・ 金沢民俗を採る会編『都市の民俗・金沢』国書刊行会、1984年。
- ・ 小林忠雄『金沢、まちの記憶 五感の記憶』能登印刷出版部、2009年。
- ・ 河野友美『味と文化』講談社現在新書、1977年。
- ・ 国土交通省気象庁 HP「過去の気象データ検索」
- ・ SAS 地方都市グループ『現代和菓子考―金沢で見つけたもの』伸光社、1981年。
- ・ 総務省「家計調査」
- ・ 総務省「統計でみる市町村のすがた」2018年。
- ・ 総務省「統計でみる都道府県のすがた」2019年。
- ・ 祖父江孝男『県民性の人間学』筑摩文庫、2012年。
- ・ 武光誠『県民性の日本地図』文春新書、2001年。
- ・ 田中喜男『金沢・再発見 その伝統と情緒』日本書院、1969年。
- ・ 田中喜男『わが町の歴史 金沢』文一総合出版、1979年。
- ・ 田中喜男『加賀百万石』教育社、1980年。
- ・ 田中喜男『金沢町人の世界』国書刊行会、1988年。
- ・ 千代芳子・大島宗翠・小林忠雄・吉村伸之助『金沢の和菓子』十月社、1994年。
- ・ 「日本の食生活全集 石川」編集委員会『聞き書き 石川の食事』農文協、1988年。
- ・ 樋口弘『本邦糖業史』ダイヤモンド社、1935年。
- ・ 山辺規子『甘味の文化』ドメス出版、2017年。

(執筆 宮田安彦)

おわりに

金沢市がアイスクリーム消費においてトップであることは、北陸という冷涼で雪の多い地域のイメージからのギャップを感じさせることも手伝って近年の話題となっていたが、その理由については、家計調査の結果と経験談に基づく推測が中心であり、確かなことは不明のままであった。

そこで今回、その状況を突破し、もう1歩深い分析をすべく調査を企画、実行したわけであるが、結果としては文字通り「もう1歩」でとどまるものとなったという感がある。それは何より、金沢市と同様に高収入・高支出の都市型経済に生きる東京都区部の市民との比較において、とりわけ夏期（7、8月）のアイスクリーム消費金額がめだって高くなることを説明する有力な要素を見付けられなかったことによる。これは、1つには予備調査的な意味合いを含ませたグループインタビューにおいて、冬にアイスクリームを食べる理由についてはいくつかの仮説的意見が得られたものの夏についてはそうしたヒントは皆無であり（金沢市民も夏期における金沢人特有の行動について思いあたることがなかった）、我々自身も「冬でもアイスを食べる金沢市民」こそカギを握るのではないかという固定観念にとらわれていたこと、もう一つは、調査のタイミングの問題から、喫食行動調査を夏期について企画・実施することができなかったことによる。夏期、冬期を含め、より多いサンプル数で、アイスクリーム以外の食をも含めた喫食行動調査を行い、これを性別、年齢別等で分析することができれば、「さらにもう1歩」先に進めることと思うが、これは今後の課題にしたい。

他方で、アイスクリーム消費の全体的な底上げを説明する要素として、グループインタビューにおいて金沢市民の甘いもの好きについて何件かの言及はあったが、金沢の歴史を紐解くことで、それが江戸の昔より、城下町金沢の武家社会の中での商家に根付いた和菓子文化の存在によるものであることを確認できたように思う。しかし、甘いもの好きの中にも、糖分、脂肪分、テクスチャーなど味覚に関する細かい嗜好の分類は可能であり、和菓子好きとアイスクリーム好きの詳細な関係については別途綿密な調査が必要であろう。

ところで、本調査結果を分析・考察中に、2018年のアイスクリーム消費金額ランキング発表の報を耳にし、金沢市が予想外の低い順位に落ちたことを知った。しかし、元々金沢市民のアイスクリーム消費は年によって結構な幅での上下の振れを見せており、来年、再来年の結果をみてからでないと金沢市民を取り巻く状況が変わったかどうかは判断できない。そして、一般に家の広さなどの住に関する変化は遅いこと、北陸地域におけるアイスクリーム安売り競争はスーパーマーケット間の競合の激化によって緩和される雰囲気にはないこと、さらに江戸時代より続く甘いものへの嗜好がそう短期に変化するという事は考えにくいことから、我々はランキングの低下は一時的なものである可能性が高いとみている。事実、2018年においても菓子類の消費金額は金沢市が98,944円と前年に引き続き全国第1位であり、うち「その他の和生菓子」は14,118円とこれも前年に引き続き全国1位であり、間食への嗜好、甘いものへの嗜好についての変化は見られない。

ただし、菓子類の消費金額は、全国第2位、3位、4位のさいたま市、奈良市、岐阜市において大幅に上昇しているのに対して金沢市においてはかなり減少しており、その減少の度合が、チョコレート（1位から2位へ）やケーキ（1位から3位へ）に比べ、アイスクリームにおいてより大きく表れたという形になっている。

こうした状況がどうなるのか。来年の結果を注視したい。

最後に、グループインタビューにご協力いただいた金沢市役所の方々、澁谷工業株式会社の方々、金沢市高砂大学校同窓会の方々、街頭インタビューでご協力いただいたアルビス株式会社、株式会社大阪屋ショップ、それに街頭インタビューおよび喫食行動調査でご協力いただいた金沢星稜大学の川澄准教授とそのゼミ生の皆様に、厚くお礼申し上げます。

大妻女子大学家政学部
ライフデザイン学科
教授 宮田 安彦

<編集後記>

今回の調査の中では、金沢のアイスクリームの消費金額が多い理由・背景についていろいろな人から示唆をいただくことができました。事前調査の段階では金沢市に展開するスーパーマーケットの責任者の方々とお会いし、「安売り」「半額セール」のスーパー側の仕掛けがアイスクリーム喫食の習慣化につながったとのお話もお聞きし、本調査の結果でもこれが1つの事実だと確認することができました。また、金沢市在住のご年配の方からは、戦禍に見舞われなかったことから駄菓子さんが戦後間もない頃にアイス売り始めたことや、ある家庭では今も月命日にお坊さんが来るので和菓子を準備しておくことなど、歴史や宗教に関する貴重な情報をいただき、理由・背景を推測する良いヒントにもなりました。こうした調査結果を総合して、要約で述べた5つの要素が金沢のアイスクリーム消費を底上げした必要条件だと判断しましたが、それですべてを言い尽くせたとはいえず、まだまだ不十分な部分もあったのかもしれない。

しかしそれでも、今回のレポートをもって当協会として永年の課題、「なぜ、金沢？」を一区切りさせることができたと考えます。このことは、今回の調査に対して好意的に協力くださった金沢市の関係者の方々のお陰であり、他方で情報をまとめて上げていく上で大きくご尽力いただいた大妻女子大学の宮田教授のお陰でした。ご協力をいただいたすべての皆様に対し、日本アイスクリーム協会として、ここに改めて深く感謝申し上げる次第です。

一般社団法人 日本アイスクリーム協会
事務局長 丸林 勝之

本件に関するお問い合わせ先：

一般社団法人 日本アイスクリーム協会

Tel : 03-3264-3104 Fax : 03-3230-1354

E-mail : icekyo@icecream.or.jp